

説教題 「損知らず」

聖書箇所

マタイによる福音書10章7—15節

7 行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。

8 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。

9 帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。

10 旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働者が食べ物を受けるのは当然である。

11 町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。

12 その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。

13 家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。

14 あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようともしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。

15 はっきり言うておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地のほうが軽い罰で済む。」

本日の箇所には、イエス・キリストが弟子たちを伝道旅行に派遣するにあたってその弟子たちに与えられた言葉が記されています。これらの言葉の中で、本日は特に8節を取り上げます。8節でイエス・キリストは「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい」と仰います。この言葉の中でも、特に「ただで受けたのだから、ただで与えなさい」という言葉に着目したいと思います。そうです。この当時のイエス様の初代の弟子たちも、そして今ここに集っている私たちも、イエス・キリストに出会った者たちはみんな、イエス・キリストから、「ただで受けた」のです。クリスチャンとはイエス・キリストから「ただで受けた」ことを知っている人のこと

でしょう。

では、何を「ただで受けた」のでしょうか。それは、救いを「ただで受けた」のです。この点において、例えば、旧約聖書のヨブ記の主人公ヨブは似たことを言っていますが、勿論その言葉はイエス・キリストの言葉とは似て非なるものです。私は実は旧約聖書の中ではヨブ記を特に愛していますが、ヨブの言葉には限界を見ざるを得ません。ヨブは言っています。ヨブ記1章21節です。「私は裸で母の胎を出た。裸でそこへ帰ろう。主は与え、主は奪う。主のみ名はたたえられよ」。これは、ほとんど「男なら」という歌の世界と同じことを言っているといえます。確か林伊佐緒が歌っていたのではないかと思います。

「男なら 男なら 未練残すな昔の夢に もとをただせば裸じゃないか  
度胸ひとつで押して行け 男ならやってみな」

もう一番聞いてください。ますますヨブに近づきます。

「男なら男なら 生まれたときは裸じゃないか 死んで行くのも裸じゃないか

生きている間の一仕事 男ならやってみな」

勿論、聖書は歌謡曲ではありませんから、「主は与え、主は奪う」という言葉が付け加えられてはいますが、裸で生まれ、裸で去っていくという発想は同じです。しかし、クリスチャンの発想は、ヨブとは違います。クリスチャンは一度生まれの人間ではないからです。これは、1800年代半ばから1900年代初頭にかけて活躍したウィリアム・ジェームズというアメリカを代表する哲学者であり心理学者であった人物の言ったことです。

ジェームズは、クリスチャンには一度生まれ型のクリスチャンと二度生まれ型のクリスチャンがいると言います。一度生まれ型のクリスチャンとは、「健全な心」のままにクリスチャンになった人のことです。その「健全な心」とは、「苦悩を長びかせることが体質的にできないような気質で、ものごとを楽観的に見ようとする気質である」とジェームズは言います。

反対に、二度生まれ型のクリスチャンとは「病める魂」を持ってクリスチャンになった人のことです。「病める魂」の方は、「私たちの人生では悪い面のほうがその真の本質をなしているのであって、世界の意味は、私たちが人生の悪い面を最も真剣に考えるとき、最も切実に感じられる、と確信する」ような魂です。すなわち、ジェームズの言うところの「健全な心」を有する人間とは、「幸福になるためにただ一度の生誕だけで足りる」ような人間です。それに対して、「病める魂」を有する人間とは、「幸福になるために二度の

生誕を必要とする」ような人間です。この「二度生まれ型」の人間における二度目の生誕は「回心」によって可能となります。このようなジェームズの考え方に対して、私はクリスチャンとは、全て「二度生まれ型」ではないかと思っております。もっと言うなら、「二度生まれ型」でなければ、クリスチャンとはいえないのではないかとさえ思っております。そして、イエス・キリストの弟子たちは全て二度生まれ型のクリスチャンであつたに違いありません。そのことを確信するが故にこそ、イエス・キリストは8節の言葉を、弟子たちに向かって語られたのでしょう。そこには、「二度生まれ」が前提されています。曰く、

「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」

イエス・キリストが考えておられる「ただで与える」内容とは、「病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払う」ということにほかならないでしょう。だとすれば、弟子たちはそれまでの時点で、病気の癒しであるかどうかはともかく、何らかの悩み、苦しみからの救いの恵みをイエス・キリストから受けていたに違いありません。それは、正に弟子たちにとって「二度生まれ」の体験であつたと言えるでしょう。ウィリアム・ジェームズの言うところの「二度生まれ型」の人間とは、言い換えれば、人生の途上で何らかの形でどん底の状態に陥つたことを自覚し、そのどん底でイエス・キリストに出会って救い出された人間のことにほかなりません。そのような人間は確かに一度は母の胎内から裸でこの世に生まれ出ました。しかし、その後、イエス・キリストの救いに与ったことにより、その人は最早、「裸で土に帰る」ことはありません。クリスチャンは、もはや裸ではありません。どんな人生の不幸も、その人からイエス・キリストの救いを、すなわち二度目の誕生の恵みを奪い取ることは出来ないからです。このようなイエス・キリストの救いの恵みの自覚の中で日々を過ごす人は、損ということを知りません。そのような人は、日々出会いの中で無償の愛を与え続けることができます。それは、ふと気付けばイエス・キリストと同じ日々を生きることになります。イエス・キリストこそ、私たちが救うべく、十字架について死ぬほどの損を全く知らない人でありました。私たちが、このイエス・キリストの御愛を忘れるなら、私たちは「損知らず」でなく「恩知らず」ということになるでしょう。私は、これまで数え切れない人のご恩に与りながら、その恩を忘れること甚だしく、絶望の声を上げて夜中に飛び起きるほどですが、そんな私の恩知らずは、イエス・キリストに対する私の恩知らずに較べれば高が知れています。そんな恩知らずの私の人生は、実に

すがすがしさにかける人生です。私は恩知らずをやめて、損知らずになりたいと心の底から願います。そこで、思い出すのは聖歌 604 番の「望みも消えゆくまでに」です。

①望みも消え行くまでに 世の嵐に悩む時  
数えてみよ主の恵み 汝が心は安きを得ん  
(くり返し) 数えよ主の恵み 数えよ主の恵み  
数えよ一つずつ 数えてみよ主の恵み

②主の給いし十字架を 担いきれず沈む時  
数えてみよ主の恵み 眩きなどいかであらん  
(くり返し)

③世の楽しみ 富 知識 汝が心を誘う時  
数えてみよ主の恵み 天津国の幸(さち)に酔わん  
(くり返し)

私たちの罪のために十字架につき給いし主の恵みを数えれば、最早、私たちの辞書に「損」という字はありません。私たちがこの身の全てを誰かに与えようとも、私たちには主イエス・キリストの救いの恵みが残ります。この恵みは、たとえ私たちが地獄の底に落ちようとも、それは、もし地獄というところがあるとしての話ですが、地獄の底まで私たちを離れません。それ故、地獄も天国です。

一日の終わりに、その一日の損を数えて歯軋りする人生ほど空しいものはございません。地獄の底までも私たちを離れることのないイエス・キリストの救いの恵みに裏打ちされた、骨惜しみしない人生ほど豊かな人生はないでしょう。そのような人生へと、イエス・キリストは今日こそ私たちを背中をドンと押して送り出してください。「ただで与えよ」と言って。

祈り「神様、イエス・キリストを私たちそれぞれの人生にお遣わし下さり、ただで救ってください有難うございました。そして、本日は『ただで与えよ』とのお言葉をくださり、有難うございました。この祈り、主イエス・キリストのみ名を通してお捧げ致します。アーメン。